



波立裕矢

■ 第32回芥川也寸志サントリー作曲賞受賞記念サントリー芸術財団委嘱作品

『空を飛ぶために +★彡+』 打楽器とオーケストラのための (2024)

作曲当初、私は打楽器の独奏を据えたオーケストラという編成を前に、加速度的に変化する社会における人々の獐猛なステップ*と、その社会の行く末を音楽で描くことを構想した。モーリス・ラヴェルが約100年前に、ウィーンの貴族政治の崩壊をワルツで表現したように。

若年層の世論がYouTube ShortsやTikTokにハックされた現代日本は、ラヴェルが見た世紀末のハプスブルグ帝国と同様、その「崩壊」の入り口にあるといえるだろう。

しかし作曲途中の音楽がドビュッシーのとある練習曲と深く共鳴していることに気づいた私は、もはやこの社会とその崩壊を舞曲に投影することに関心が持てなくなっていた。

そして、新たに聞こえた極限に神経質な音楽と、同時に眼前に浮かんだ小刻みな震えの印象に、私は「空を飛ぶ」ときと同じ物理的な機運を感じた。

音楽は打楽器奏者とオーケストラのけたたましいワルツ*の応酬が始まる。一度その頂点を見たところで独奏打楽器による短いカデンツァが挿入される。その後、様々な舞曲をめぐるめくめく通過しふたび大きな爆発が起こったあと、その残滓から立ち上る素材が支配する緩徐部へと音楽は移る。素材が積み重なり和声の原型のような音楽が奏された先に訪れるのは、本作で最も静かな、微分音を含んだ素材によるたゆたう音楽の部分。その素材が発展した先に、ドビュッシーの練習曲の再作曲によるクライマックスが待っている(その途中で前半の素材も軽く再現される)。

果たして空は飛べるのか? ところで誰が、何が空を飛ぶのだろう。

* 今様のダンサブルな音楽は引用しようと思わなかった。私は好きだが、オーケストラに相応しくなく思われたので。

Solo Perc (2 Cowbells / 5 Wood Blocks / Bamboo Chimes / Shell Chimes / Hi-Hat Cym / Suspended Cym / Snare Drum / 4 Tom-Toms / Bass Drum / 2 Bongos / 2 Congas / Djembe / Vib / Guiro) - 3 Fl (Picc / A-Fl) / 2 Ob / E-Hrn / 2 Cl / Bs-Cl / 2 Fg / C-Fg - 4 Hrn / 3 Trp / 3 Trb / Tub - 4 Perc (I=Timpani / Shaker / Guiro / Ratchet II=Bass Drum III=Tam-Tam / Tamb / Tri / Suspended Cym / Whip / Siren / Flexatone IV=Mar / Xyl / Suspended Cym / Siren Whistle / Antique Cym / Tri / Police Whistle / Flexatone) - Pf - Hrp - Strings (14-12-10-8-6)

波立裕矢 ● Yuya Haryu

1995年生まれ。2018年愛知県立芸術大学卒業、21年東京藝術大学大学院修士課程作曲専攻修了。第35回現音作曲新人賞、第89回日本音楽コンクール作曲部門第1位、第32回芥川也寸志サントリー作曲賞受賞。これまでに作曲を鈴木純明、小崎光洋、山本裕之、久留智之に師事。洗足学園音楽大学、武蔵野音楽大学、茨城県立水戸第三高等学校非常勤講師。たんぼぼコレクティブ共同代表。



石川健人

■ 第34回芥川也寸志サントリー作曲賞候補作品

『ブリコラ-じゅげむ』 (2023)

初演 2023年6月16日 東京藝術大学第6ホール
ジョルト・ナジ特別招聘教授「作曲科ワークショップ 2023」

タイトルは、フランスの文化人類学者レヴィ=ストロースの「ブリコラージュ」の概念(ありあわせで、必要なものを作る)と、日本の古典落語の「寿限無」を掛け合わせた私の造語です。

「寿限無」のストーリーの中には、誰もが親しみやすいコミカルな要素とともに、幕の内弁当や生け花に代表される日本的な「寄せ集め・取り合わせ」の思考が反映されています。子どもの命名をたのまれた住職が、長寿や多幸を願い縁起のいい単語をつらねてゆく様子は日本的でもあり、また「ブリコラージュ的」とも言えないでしょうか。

結果としてその長すぎる名前(じゅげむ じゅげむ ごこうのすりきれ かいじやりすいぎよの すいぎようまつ うんらいまつ ふうらいまつ ぐうねるところにすむところ やぶらこうじのぶらこうじ ばいぼ ばいぼ ばいぼの しゅーりんがん しゅーりんがんのぐーりんたい ぐーりんたいのぼんぼこぴーの ぼんぼこなーの ちょうきゅうめいのちょうすけ)が仇となり非業の死をとげる子ども…というオチのアイロニーも今作の発想源の一つとなっています。

物語中の単語から連想される素材(木・石・砂)のできた楽器、オノマトペ的な名前の響きを彷彿させる太鼓や笛、加えて子の誕生を祝う軍隊ラッパや快活明朗な長三和音など、日常的かつ祝賀的な象徴を多層的に貼り合わせ、「ブリコラージュ」のコンセプトと「寿限無」の世界が互いに浸潤するキッチュな誕生祝いの作品を作りました。

Fl (Picc) / Ob / Es-Cl / S-Sax (Maracas) / Fg (Tone Tongue / Electric Whistle) - Hrn / Trp / Trb (Toy Bell) / Tub (Rubber Duck / Rain Stick / Buzzer) - 2 Perc (I=3 Mokushos / Slap Stick / Hi-Hat / Timbales / Bell Tree / 3 Metal Pipes / Suspended Cym / Crusher / 2 Chinese Gongs / Slide Whistle II=Bamboo Chime / Gong / 3 Temple Blocks / Ratchet / Ride Cym / Wind Chime / Cast / Kick Drum / Anvil / Bongo / Timp / Xyl) - Pf - Hrp - Strings (Vn I / Vn II / Va / Vc (Electric Whistle) / DB)

石川健人 ● Kento Ishikawa

1997年東京都生まれ。社会問題や音楽外のあらゆる関心事からアイディアを参照し、多層的なテクスチャをつくりあげてゆく創作スタイルで第91回日本音楽コンクール作曲部門第1位(オーケストラ作品)、明治安田賞、三善賞、三菱地所賞ほか多数受賞。東京藝術大学作曲科を卒業後、同大学院音楽研究科作曲専攻首席修了。



河島昌史

■ 第34回芥川也寸志サントリー作曲賞候補作品

『e→e IV』 (2022)

初演 2023年2月10日 バーゼル、ドン・ボスコ音楽文化センター内 パウル・ザッハーザール
バーゼル作曲コンクール

『e→e IV』は一人の現代美術作家の作品の展示がされていた展覧会での経験をもとに作曲された。

その現代美術作家とは戦後の関西を代表する芸術運動「具体美術協会」の創始者でもある吉原治良(1905~72)である。彼の作品は個人、美術館などに所有されているので、吉原の作品は作家個人に焦点を当てた企画展だけでなく、美術館・個人のコレクション展でも展示されている機会が多く、様々な展覧会で彼の作品に触れる機会があり、これらの経験が『e→e IV』の創作に影響する。

「配列・組み合わせによって表出される素材の多角性」——吉原作品の展覧会からの影響であると同時に『e→e IV』のコンセプトになる。

吉原の代表的な作風は一つのキャンバスに「円」。そのシンプルで大胆な構図の作品はなんの脈絡もなく展示されているコレクション展では異彩を放つ。吉原個人に焦点を当てた企画展ではコレクション展とは異なる印象をもつ。彼の作品のモチーフは「円」だけなので、吉原個人の企画展ではひたすら「円」のみを鑑賞することになる。同様のモチーフを鑑賞し続けると、それぞれの「円」の形の違いに気づく。「配列・組み合わせによって表出される素材の多角性」の体験を音楽作品内で実現させる方法の考察が『e→e IV』の作曲につながった。

『e→e IV』は2つのセクションから成り立っており、それぞれのセクションで使用している素材は限定されている。第一セクションでは空間素材(縦軸)の組み合わせ。第二セクションでは時間素材(横軸)の配列を限定された素材のなかで行っている。

限定された素材の連続による持続的な時間の構築が『e→e IV』の特徴であり、作曲者が目指している時間構造である。

2 Fl / Ob / E-Hrn / 2 Cl / Bs-Cl / 2 Fg / C-Fg - 4 Hrn / 2 Trp / 3 Trb - Timp - 2 Perc (I=Vib / Almglocken / Suspended Cym on Timp II=Mar / Bass Drum) - Pf - Hrp - Strings (8-8-6-5-4)

河島昌史 ● Masashi Kawashima

1980年生まれ。兵庫県尼崎市出身。2005年大阪音楽大学卒業。08年に渡米。22年グラーツ芸術大学修士課程修了。ドイツのゲルハルト・ハウプトマン劇場作曲コンクール(管弦楽)第1位など入選・入賞多数。ドイツのシュトゥットガルト放送交響楽団、スイスのバーゼル交響楽団などに作品が演奏される。



山邊光二

■ 第34回芥川也寸志サントリー作曲賞候補作品

『Underscore』

オーケストラのための (2022)

初演 2023年5月28日 東京オペラシティコンサートホール
2023年度 武満徹作曲賞本選演奏会

J. ケージの『夢』が下敷きの私のピアノ独奏曲を大編成に模倣(エミュレート)し、そのために引き起こされる不具合(バグ/グリッチ)を導入部と7つの変奏で無理やり“遊ぼう”という試みです。ここでのエミュレートとは、非常にピアノスティックな独奏曲をオーケストラへ移すことで生じる不具合を修正/調整しながら再構成する過程を指しますが、この方法は私の創作の延長線上にある「編曲の程度」、「再作曲」、「ピアノリダクション」等の興味を反映しています。原作の『夢』はシンプルな音遣いですが、この作品で練り直された構造と楽想ではほとんど原型を留めておらず、私自身が予想し得なかった(半ば暴走気味の)突飛なアイデアが駆け巡ります。微かに聴きとれる原曲を透かした音型・音の組織は繰り返し現れますが、再現性は皆無であり「引用」とはいえないレベルにまで歪められています。モチーフやフレーズが常に「下降しては浮き上がり、再び下降する」過程を繰り返しながら、音楽の全体像は高音域から低音域へと漂うように降りていきます。また、指揮者の速い振りに反して音は長く伸びやかに、遅い振りでは細分化されたモチーフが次々と交替して忙しく聴こえるように、音と身体そして視覚と聴覚のズレを意識しました。原曲からは大きくかけ離れた先行き不透明のトリッキーな展開の連続、辿り着く先の分からない時間体験はJ. ケージの『夢』の一片とでもいえましょうか。

2 Fl / Picc / 2 Ob / 2 Cl / 2 Fg - 4 Hrn / 2 Trp / 2 T-Trb / Bs-Trb - 2 Perc (I=Antique Cym / Mar / Sleigh Bells / Suspended Cym / Whip II=Glock / Tubular Bells / Vib) - Pf - Hrp - Strings (12-12-8-6-4)

山邊光二 ● Koji Yamabe

1990年群馬生まれ。国立音楽大学卒業、同大学院音楽研究科修士課程作曲専攻を首席で修了。作曲を森垣桂一、渡辺俊哉に師事。2023年度武満徹作曲賞第2位(審査員:近藤謙)。第11回JFC作曲賞入選。第26回奏楽堂日本歌曲コンクール入選。群馬音楽協会会員。日本作曲家協議会会員。